

福祉系 対人援助職養成の 現場から^④

西川 友理

元気になったA君

「先生！」

「わぁ、お久しぶり！元気だった？」

夏休みに入ったキャンパスに、不意に数年前の卒業生A君が訪ねてきました。彼については、1年ほど前に、職場で自分らしく動くことが出来ず、行き詰まり、仕事を辞めたい等と言っているらしいという噂は聞いていました。ところが今日はなんだか朗らかな様子。彼いわく、今でも上手くいっているとは言い難いけれど、なんとかスランプを抜け出し、やっと前を向けるようになりつつあるとの事。

短大時代の思い出話やコロナ禍での園の対応、大学の対応、他の卒業生についての近況など、マスク越しのソーシャルディスタンスを保ったおしゃべりは尽きません。

「…で、結局、学生の時にいつもつるんでいた男子仲間のうち、僕以外は皆、保

育から離れちゃいましたよ。」

ちょっと残念そうなA君です。毎年何人かは男子学生が保育士として就職します。そして、何人かは保育の現場から離れていきます。

そんな話を聞いたたびに、

「ああそうだよねえ、保育園ってやっぱり女性が多い社会だからねえ…男性っただけで、やっていきにくいところもあるんだろうねえ…。」

とっていました。

保育現場の男性の扱い

しかし、ハタと振り返ってみると、女性が多い社会であるゆえに何がマズかったのかという具体的な話や、男性が少なく女性ばかりだからという事が直接的な原因で退職したという話を、卒業生本人から聞くことはないように感じています。「女性社会だから、大変なんで

すよ」という話をする男子卒業生も少しはいるのですが、じっくり聞いていくと、人間関係や個人の適性など、「それ男性だから、というわけじゃないよね…?」という理由を話す卒業生が多いのです。

一方で、就職活動に際しては、実は結構具体的な男性差別の話聞くのです。さすがに露骨に「うちの園では男性は採用しません」と言うようなところはありませんが、ここ数年だけでもそれを匂わせるようなことを言われたというエピソードは、就職活動中の学生からちらほら聞いています。

「うーん、うちは、今まで男性しか雇ったことないのよね…あ、別に男子がダメってことじゃないのよ、ただ、今まではね、ないのよねえ…。」

「うちの園、男性の更衣室ないのよ。園内は大人の男性が働くことを想定せず作ってあるから…。」

「保護者さんの中には、うちが女性ばかりだから安心とおっしゃる人もいて…男性職員が入ってきたら、またそれ用のマニュアルみたいなのも、作らなきゃなあ…。」

これに対して学生曰く、

「いや、それ、今オレの目の前で言う?! っていうようなこと、平気で言うんですよ!」

それを横で聞いていた友人たちも、

「何その“わかるでしょ、察して!”みたいな対応!」

「行く必要ないない、行かんでええ行かんでええ、そんなとこ!!」

とブーイングです。

10年ほど前には、実習ですら男子学生

お断りという保育園もあったという話も聞いたことがあります。

もちろん、男性保育士を積極的に採用している園もあります。男性保育士の割合が比較的多い園には、女子会ならぬ男子会を作っているところもあるようです。そんな園では「やはり父性と母性両方ある事が大事」「男性は、力仕事やダイナミックな遊び方という分野で威力を発揮してくれるし、ありがたい」と、大変重宝される様子。

かくして、もともと男性保育士を受け入れている所は、より男子学生が入りやすくなっていき、そうでない園はますます受け入れが難しくなる、ということになります。

ですから、男子学生が就職活動をする時には、「自分の保育観にあった保育をしている園か」「法人規模はどれくらいか」「給与や休日はどうなっているか」などという事よりもまず、「男性保育士を歓迎してくれる園か」「男性保育士が全職員中何%在職しているか」という事をチェックすることになります。

就職試験前の園見学から帰ってきた男子学生はよく「男の子なんだからいざれ園長、副園長になってもらいたい。そのつもりで採用するからね」と言われてきた、と興奮気味に報告に来ます。

「スゴイ、俺、ビックリしました。頑張ります!」

そうかそうか、受け入れてもらえるところでよかったね、と思いつつも「男性は男性らしく力仕事やダイナミックな

遊びを」とか「男性なんだから、いずれは園長候補になってほしい」といった言葉の端々に、強いジェンダーステレオタイプ（人格、特性、能力、社会的役割、行動などについて、その社会でその性別に対して“当たり前”と考えられている画一的な思い込み）を感じます。女子学生が就職試験前後に「いずれ園長候補に」などと言われた、という話は聞いたことがありません。正直、なんとも座りの悪い思いはあります。

保育士の中で男性が占める割合

厚生労働省が出している賃金構造基本統計調査によれば、平成30年の時点で、保育士のうち、女性が21万6220人であるのに対し男性が1万3400人のことです¹⁾。つまり、保育士全体のうち、男性は約5.8%しかいません。20人に1人くらい、実感として確かにそれくらいだと思います。

ここでふと、そういえば現場職員だけでなく、園長先生も女性が多いけれど、男性の園長先生ってもう少しいたんじゃかしら、と気付きました。園の管理職的な立場の方が集まる会合に時々参加しますが、そんなに男性が少ないということはない印象があります。

そこで、保育園の一覧が園長名付きでインターネットに公表されている自治体を探しますと、わずかに見つかりました。これをもとにおそらく男性だと思われる方の名前をピックアップし、各自治体での男性の園長先生の割合を計算してみました。中には名前では性別が判別

できない方も2～3名いらっしゃったので、正確ではありませんが、ざっと把握してみようと思い、やってみました。

すると、ある都道府県（都道府県ランキングで見ると、人口数は半分より少し上、人口密度で言うと下から3分の1くらいのところにある県です）にある保育園の園長先生は、41%が男性でした。また、ある都市（人口40万人ちょっとの市です）では、36%が男性でした。園長名付きの保育園一覧は私がざっと探した限りこの2つの自治体でしか見つかりませんでした。厚生労働省の発表している男性保育士率とははるかな格差があり、大変驚きました。でも確かに、体感的にはそれくらいの割合かなあという印象があります。

ある園の先生にこの話をしたところ、「そりゃあ、同族経営で長男が継ぐ、ということがあるんじゃない？経営や運営についてもやっていかないといけないし、現場の運営は保育をずっとやってきた女性でOKだとしても、経営の方はそういうわけにはいかないでしょ。」

と言われました、いやいや、確かに保育園の園長は保育士でなくても資格としては問題ないのですが、このご時世に、経営は男性の役割だといわんばかりのその考え方もかなりアナクロです。

管理職的な立場には男性を、ということところにも、ジェンダーステレオタイプを感じます。

男性の相談しにくさ

職場でのトラブルや退職後の進路の

あり方など、就職してからも相談に乗ってほしいという卒業生が時々学校に来ます。ところがこれについても、圧倒的に女子が多いように感じています。

この文章の冒頭に「女性社会だからそのしんどさをあまり具体的に聞いたことがない」と書きましたが、もしかすると、出身校の教職員に対してしんどさを口に出すこと自体が恥ずかしいという思いがあるのかもしれない。また、「保育園の男性保育士というのは、そういうものだから」と飲み込んで、問題にすることではないと考えているのかもしれない。あるいは、私が女性だから、女性社会がしんどいということを男性として言いにくいなのかもしれない。

男性の卒業生は、どちらかというところ「あの時しんどかったんですよ」としんどい時期が終わってから、話に来ます。それは保育分野を離れた場合でも、また自分の働ける場所を見つけて、なんとか呼吸ができる様になり、朗らかな顔になってから、ようやく学校に顔を見せに来ます。そういえば、冒頭のA君もそうでした。

男が弱音を吐くこと、相談することは、恥ずかしいこと。なぜなら、男だから。

学生の中にもまた、ジェンダーステレオタイプがあるように見受けられます。

男性と保育士のお給料

保育士をめざす彼らにとって、ジェンダーステレオタイプからくるしんどさの最も大きなものは、給与にまつわる事ではないでしょうか。

保育士の給与は、世間でも言われているように、それほど高額ではありません。かといって、ものすごく低いというわけでもなく、普通に生活していくぶんには、十分な収入が得られます。しかし結婚するとなると、ちょっと考え込んでしまう、という男子学生が時々います。

「僕は、奥さんが家において家を守ってほしい、って思うんです。あの、自分がそうだったから。」

「やっぱり奥さんが家において、家事してくれる家っていうのに憧れがあって…いや、自分は家事しないってわけじゃないんですけど、でも、やっぱりそういうのがしっくりくるっていうか。」

「いや、もちろん親と同じ生活を出来る時代ではないとはわかってるんですよ。1世帯2馬力じゃないとやっていけないということは当然だと、頭ではわかっているんだけど…」

むにやむにやししながら、最後にボソッと一言。

「…だって、それが男の甲斐性ってものでしょ。」

そうなってくると、同世代の、別仕事に就いている友達の給料と比較してしまう。でも、保育の仕事には就きたい。

「だから、少しでもお給料のいい保育園をさがさない。」

否定はしませんが、「そっかあ…」としか言えない私です。

保護者から寄せられる 性にまつわる心配

それから男性保育士については、女兒

のオムツを替えや、着替えの補助をする場面で保護者が拒否反応を示す、という話がよく聞かれます。今はずいぶん少なくなりましたが、それでもやはり何かの拍子に、性的な不安を理由に男性保育士に対する拒否感を示される親御さんがいるようです。とくに男性保育士やベビーシッターによる事件がテレビに出た直後は、敏感に反応したり、不安を表したりする親御さんも出てきます。

（ところでこれについても、女性が男児のオムツを変えることについての批判を聞いたことがないですね…。）

ツイッターの投稿が面白くて有名になった男性保育士で、現在は現場で働きながらも顧問保育士として活躍中の「てい先生」という方がいらっしゃいます。この方が、あるインタビューで、男性保育士に性的な不快感を表す保護者の話題になった時に、このように答えていらっしゃいました。

「仮に保護者の方から『うちの娘のオムツ替えをするのはやめてください』って言われたのが自分だったとしても、『分かりました』って言うだけかなという感じですが。その後、子どもや親御さんとの信頼関係をしっかり築いていけば、状況が変わっていくこともあると思います。」 2)

保護者が性的な意味での不安や戸惑い、拒否を感じてしまうというのはしょうがないことです。しょうがない、というのは、男性保育士にそれをあきらめて受け入れろと言っているわけではありません。人の親として、それが不安にな

るという事を否定することはできない、という意味です。

だから、保護者がそのような不安を訴えた時に、「それは差別的な見方です、うちの保育士はそんな職員ではありません、考えを改めてください」と伝えて、状況が好転するとは思えません。また、そのような事を言いきれる客観的な証拠も用意のしようがありません。

それに子どもに対する性教育という視点で考えた場合、単純に「男性も女性もちゃんと資格のある保育士なんだから、どの子どもにも同じ対応でいいでしょう」と、割り切れる話ではないと思います。男性保育士個人のあり方だけではなく、その園自体が子どもに性をどう伝えるかという話でもあるのです。

一方で、そもそも保育園は子どもの養育・保護を行うと共に、保護者の方々の安心も確保するための場所です。ですから、上記のてい先生のような話があった場合、可能であれば「そうですか、では男性保育士××は、〇〇ちゃんのオムツ替えやトイレ介助からはいったん外しますね。」と伝えて、まずは安心してもらおう。これは決して、保護者の言いなりになるということではありません。その上で、その後のかかわりのあり方を、園も保護者も、男性保育士本人も模索していくという方法が一番現実的なのではないかと思います。

ピンチはチャンス、とはよく言いますが、このことをきっかけに、ジェンダーについて、また性教育について、保護者と園の職員と一緒に学んでいく機会にする。それが子どもにとっても、大きな生活の学びになるのではないでしょう

か。今日話し合って明日すぐに何かが変わる、というものではありませんが、まずは誠実に対応することで、一人一人の偏見、差別、配慮などにまつわる想像力とバランス感覚がしなやかに鍛えられていくのではないのでしょうか。

話しあって、理解しあっていく

性的な問題だけでなく、それ以外のあらゆる男性保育士の働きづらさに対しても、同じようにひとつひとつ、話し合い、信頼関係を築く中で、お互いに理解を深めていくしかないと感じます。

そのプロセスの中で、例えば園内に男性用更衣室やロッカーを設置するなど、男性保育士が働きやすいシステムを整えるように組織に動きかけたり、女性保育士が考えを変える必要が出て来たり、逆に男性保育士の方が認識を改めることがあったり、あるいは保護者の認識が変わっていったりというように、様々に関係性が変化することと思われま

す。男性保育士に関して、職場にも、本人にも、男性というジェンダーステレオタイプがもとで息苦しさやしんどさが生じがちです。まるで昭和の時代に一般企業のOLが、オフィスでの女性差別に悩みつつ、日々の信頼を積み重ねつつ、おおよけにも声をあげ、徐々に状況を変化させていこうとしていた頃を見るようです。女性に対するそれは今でも場所によっては根強く残っています。数十年の時を経て、今度は保育の現場で男性保育士が、同じように悩みつつ、どのように

生きていこうか模索しています。これも単純な問題ではなく、長年かけて対応方法を育てていかねばならないものだと思います。

近年、園で初めての男性保育士として就職する卒業生も増えてきました。新入職員も慣れていなければ、職場も初めてのことばかり。様々にとまどいながら、お互いに「いいやり方」を探っていく、そのプロセスが大切なのだと思います。結局話し合って、理解しあっていくという事しかないと思います。それはもう、男性だろうが、女性だろうが、同じ事です。

養成校の教員としては、卒業生が来るか来ないかはわかりませんが、「なにかあったらいつでも話を聞くよ」という体制で待ち続けるしかありません。

とはいえ、何かもう少し積極的な行動も可能かもしれない、とも思います。卒業生にとっての、また地域の園にとっての社会資源の一つとして、どんなあり方がいいのか、私もまた卒業生や地域の園の先生方と話し合いながら、模索しています。

1) 厚生労働省「平成30年度 賃金構造基本統計調査」

2) マイナビニュース 「てい先生に聞く、保育士の本当の気持ち 第9回 『男性保育士としての苦労』」2017年12月4日

<https://news.mynavi.jp/article/happyboy-9/>